



建学の精神

東洋英和女学院は、カナダ・メソジスト教会の婦人ミッションから派遣された宣教師マーサ・J・カートメルによって1884年(明治17)に創立され、メソジスト教会を源流としたキリスト教の信仰を建学の精神としています。

この建学の精神を表わす言葉「敬神奉仕」をモットーとし、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」(マルコによる福音書12章30節)、「隣人を自分のように愛しなさい」(マルコによる福音書12章31節)とのイエスの言葉を掲げ、毎日の礼拝と教育全体を通じてこの精神を拠りどころとする人間の形成を目指しています。



東洋英和女学院 校章・マーク
カナダの国樹である楓の葉の中に、TOYOの「T」とEIWAの「E」の文字が入っています。1927年(昭和2)、当時の藤田教頭、図画担当の高沢教諭・白鳥教諭が考案しました。

学校法人 東洋英和女学院

〒106-8507 東京都港区六本木5-14-40

TEL : 03-3583-3325 FAX : 03-3584-5227



創立

1873年(明治6)明治政府が欧米諸国の強い抗議を受けて、「キリシタン禁制の高札」を撤去すると、カナダ・メソジスト教会も間髪を入れず日本での伝道活動を始め、医学博士のデビッドソン・マクドナルドと牧師であるジョージ・カックランの二人を派遣しました。二人は人物、学問、教養のいずれも優れた人々でしたが、日本では女性に直接働きかけられないもどかしさを感じていました。日本の慣習として女性は男性と連れ立って集会に同席することがなかったためです。ミッションナリーボードは女性への伝道のために1881年(明治14)に婦人ミッションを結成し、翌年カナダからの最初の女性宣教師ミス・カートメルを派遣しました。

ミス・カートメルは女子教育を通じて使命を全うしようと、東京の麻布鳥居坂に1884年(明治17)、寮の施設を備えた学校である〈東洋英和女学校〉の創設を果たします。カナダ人による教育は、英語と西欧風生活様式や教養が身につくと評判を呼びました。しかし、東洋英和の真の目的はキリスト教信仰に基づく全人教育でしたので、表面的に西欧文化を教えるのではなく人間の尊厳を教えるものでした。そこで、東洋英和で学んだ卒業生には近代女性としての自立の意識、深い精神性、そして高い水準の英語力と教養が備わりました。こうして家庭にあって家族を支えるばかりでなく、保育の場や国際的にも活躍する女性を輩出し、社会に貢献し続ける東洋英和女学院の礎が築かれました。



創立者 Martha Julia Cartmell (1845~1945年)
日本人女性に魂を救うキリストの福音を広めたいと、深い祈りをもって生涯を捧げました。



創立の背景と歴史

創立者ミス・カートメルはカナダ・オンタリオ州に生まれ、信仰の篤い養父母のもとで育ち、30代後半にはハミルトン市の官立女学校の校長職にありました。折しもカナダ婦人ミッションが結成されて日本への初の女性宣教師を募ったとき、彼女は強い召命を覚えて進んでその任を受け、わずか3カ月後には日本に向けて旅立ちます。

横浜に上陸したミス・カートメルは、驚くべき行動力で本国カナダの教会に働きかけ、来日2年目にして東洋英和女学校を創立。わずか2名の生徒から始まった学校は、折からの欧化主義政策の時流にも乗り、発展していきます。ミス・カートメルは学校だけでなく広く一般にも伝道したいと願っていました。重いリウマチのために家に閉じこもりがちだった女性の要望に応じて訪問したことがきっかけとなって女性のためのバイブルクラスが始まり、青年たちとのバイブルクラスはのちの築地教会に発展します。

開校の翌年には、過労がたたってミス・カートメルは体調を崩してしまいます。ミス・スペンサーがカナダから来日し応援に加わりましたが、ミス・カートメルの体調は回復することなく、ついに学校の運営を後任のラーズ校長(トーマス・A.ラーズと結婚したミス・スペンサー)に託し、カナダに帰国しました。その後はミス・カートメルに続く宣教師たちがその働きを受け継ぎました。

ミス・カートメルは1892年(明治25)再来日し、一時期、東洋英和でも伝道活動に努め、1894年(明治27)から2年間、山梨県の甲府に滞在し、Kofu Boy's School(のちの有朋義塾)の英語教師となりました。帰国後もカナダ各地を巡回しては〈東京の学校〉について語り、のちに続く女性宣教師派遣のために尽力し続け、第二次世界大戦が終わる年に99歳の長い生涯を閉じました。

後任となったミセス・ラーズは、時勢に流されることなく、堅実に東洋英和の基盤づくりを進めていきましたが、1890年(明治23)4月4日の夜半、校舎に押し入った強盗によって夫のトーマスが殺害され、彼女自身も重傷を負う悲劇が起きました。欧化主義の退潮と重なって一時期学校経営が危うくなる局面もありました。

しかし、ラーズ校長に続くブラックモア校長は懸命に学校の立て直しを図り、「訓令第12号」によるミッションスクールへの圧迫にあってもキリスト教教育を貫き通しました。その後もマンロー校長、クレイグ校長へと厳しくも心豊かでこまやかな女性宣教師たちによって、教育の業は引き継がれていきました。1934年(昭和9)に創立50周年を迎え、東洋英和の学校としての体制を確立したのはハミルトン校長でした。

現在の東洋英和は幼稚園から大学・大学院までを備えた総合学園へと発展しました。卒業生たちは、東洋英和の建学の精神である「敬神奉仕」の心を学び、社会にあっても家庭にあっても神を畏れ人に仕えることを喜びとし、日々の業に努めています。